

# 婦人学研究

第 47 号

1978. 10. 20

\* 言葉と女性の位置  
— 英語の場合 — 加茂映子

\* ものを書く女たち 草川八重子

第八九回例会（一九七八・四・二二）

## 言葉と女性の位置

— 英語の場合 —

加茂映子

アメリカの言語学者 Robin Lakoff の論文, 'Language and Woman's Place' (Copyright © 1973 by Cambridge Univ. Press, reprinted by BUNRI Co. Ltd.) の一部を要約しつつ、言葉と女性の位置について考えたい。

この論文はふたつの観点、①女性はどうような女性特有の表現を用いるか。②女性が話題に上せられる場合どのような表現が用いられるか、の観点から、女性が現代社会において位置づけられている実態を明らかにしようとする。Lakoff の主張の基盤となっている資料は主として彼女の生活の周辺に居る人々から集められている。すなわち白人中流階級の日常語が資料となっている。資料の抽出は彼女の主観によるものであるから、研究方法に対する批判も予想されるが、言語は元来多分に主観的要素を含むものであるから、このような方法も認められるであろうと Lakoff は言う。

幼い頃から男性は乱暴な口をきいても、男らしいと大目に見られる傾向があるが、女性の場合、しとやかに、従順にと躡けられ、レディーのイメージを目標にして大きくなっていく。これは一個の人間としての強い自己主張の手段を阻むことになるので、その結果女性自身自己の社会における役割を従属的なものだと思込みがちである。この態度が女性の用いる表現に反映するのは当然であろう。

以下においていわゆる女性らしい言葉づかいとして Lakoff が挙げる例の中からいくつか紹介し、その表現の持つ意味について考える。

### ◎ 女性に特有の感嘆詞

(1) a. Oh dear, you've put the peanut butter in  
the refrigerator again.

× b. Oh fudge, my hair is on fire.

× c. Dear me, did he kidnap the baby?

“おやおや” “あら、まあ” といったニュアンスを含む

“Oh dear” や “Oh fudge” はそのあとに続く、伝達しようとする事柄が重大なものである場合には不適切である。すなわち(1) b. c は文章として成立不可能となる。

(以下このたびの文のはじめに×印をつける。)

◎断定を避ける表現—相手に判断や決定をゆだね、自己主張をひかえる。

● 付加疑問 (tag question) を用いた文

(2) a. Sure is hot here, isn't it ?

b. The war in Vietnam is terrible, isn't it ?

この文型は状況に応じて含まれるニュアンスが異なるので必ずしも相手に責任をゆだねて自己主張をひかえているとは言えない。例えば(2) aは単に会話の糸口をひき出す働きをしているにすぎないと考えられる。かこ

の文型は自分の意見を一心の中で持ってはいるが、はつりと言うのがためらわれる場合や、自分の意見の正しさに十分確信が持てない場合にも用いられ、女性が用いるのはこのような場合であり、また女性は男性よりも頻繁にこの文型を用いると Lakoff は言う。(2) bはこの例である。もちろん実際に(2) bを口にするのが女性だけだという意味ではない。

● 質問に対する返答でありながら語尾があがる表現

c(x) When will dinner be ready ?

(y) Oh... around six o'clock...? (six o'clock, if that's OK with you. の意)

(y) も女性に多い表現であると Lakoff は言う。

◎命令 → 依頼

(3) a. Close the door.

b. Please close the door.

c. Will you close the door ?

d. Will you please close the door ?

e. Won't you close the door ?

a→e に近づくとつれていねいさの度合いが増す。すなわち 相手の意向を重んずる度合いが増すといえる。

e の否定型である e は相手が否定の返答をする可能性がかなり強いことをほのめかす。相手に拒絶の自由を多く与えるのはきわめていねいな表現である。Lakoff によれば a→e に近づくとつれてより女性に特有な、ひかえ目な表現となる。

従順さ、しとやかさを女らしいよいこととして育てられてきたことが、女性に言おうとすることを率直に述べることが妨げ、その結果、女性は社会を動かしていく活動の領域から除外される傾向がある。

第二の観点 女性が話題に上せられる場合の表現と女性の社会における位置との関係について Lakoff の挙げている例をいくつか紹介する。

saleslady, saleswoman, cleaning lady, cleaning woman

これらは女性の職業を表わす表現として普通に用いられている。“lady” という語は上品で一見女性を尊重しているように思われるけれども本格的、知的職業については普通 “lady” は用いられない。woman doctor, woman sculptor,

one-woman show などが用いられるのに対して lady doctor, lady sculptor は揶揄的なニュアンスを含み × one-lady show という表現は用いられない。× lady

power, X Ladies' lib., X Ladies' Strike for Peace などの表現がナセンスに聞こえ、実際に用いられないのは lady という語の持つ軽さがそのあとに続く名詞の表わす内容の重さとそぐわないからである。

saleslady の表現について言えば、男性の場合 salesman が唯一の表現であり X sales gentleman が用いられることは決してない。元来職業に就くのは男性であったから salesman で十分であり saleslady の場合のようにへつらう必要はないわけである。いわんや知的職業に従事するのは男性であるので man doctor などと断る必要はないのである。

文法上対応する両性関係(例: lady — gentleman)が運用上大きくずれる例として Lakoff は master — mistress, bachelor — spinster, widow — widower の場合の例を挙げている。Lakoff は Miss, Mrs, Ms の敬称や、結婚と同時に女性が未婚時代に持っていた姓を失う。—この姓とても彼女の父の姓に他ならない—問題などについてでも論じているが、もはや紹介する余地がない。

'Language and Woman's Place' を依り所として女性の社会における位置について考えてみた。Lakoff は言語学者としての立場からの Suggestions & Conclusions という章を設けており、ここではそれに触れていないので、Lakoff の論旨を十分に紹介しえたわけではないことをお断りしておく。

私たちはかつて第六十五回例会において、(寺島浩子氏発表「婦人語について」)日本語における婦人語について考えた。私たちが日本語は婦人語のある国語だ、といまさらに感じるのは、外国語を学ぶとき、それとの比較においてである。ヨーロッパ語で小説をよむとき私たちは文脈をつかみそこね、会話の男女のせりふを取りちがえることがままある。前回の例会においても、日本語における両性語のちがいは歴然と指摘されたが、ヨーロッパ語や中国語の場合は、という問にたいしては簡単に答が得られなかった。今回は英語の専門家が、残された宿題の一つをとりあげた。

報告は具体的な情況設定を説明したうえで、例文を引用しては説明がなされ、わかりやすかった。婦人語の問題は、学校英語ではほとんどとりあげないし、単に語彙の問題にかぎっても、辞書や参考書は疑問に十分に答えてはくれない。こういう機会がなければ知ることもないし、整理して考えることもなかったであろう問題が多かった。また加茂報告は、婦人語—女性が用いることば(あるいは使ってはいけない単語)の問題だけでなく、女性に言及することばをあわせて考えようとするものであった。すると、英語にも、ことばに関する女性問題がないどころではないということがわかった。

質問はまず、ミス、ミセスの他につくられたミスについて集中した。既婚婦人に対してミズを使ってもファミリー・ネームはやはり夫の姓でよぶのか? ミズは手紙には使われているが話しことばでは少いのではないか? ミズは結婚適齢期をすぎて独身でいる女性に対して用いて、ミスとミズとミセスを使い分けることもあるよう

だ。おかしくないか？ミスとミセスの別をなくすだけでなく、ミズとミスターの別もやめれば？日本語の手紙の宛名につける「様」には男女の別はないが、西欧文化のほうが何かにつけて男女を区別する、あるいはつねに対概念として考える傾向が強いのではないか？などである。言語学の立場から、西欧語に多い男性名詞女性名詞の別は、婦人語の問題とは関係のない、ことばの構造の問題だといまままで割切って考えてきたが、再考すべき問題かもしれないという疑問もだされた。

英語のなかで女性をもちあげるレディ・ファーストのレディは実はくせものであるらしい。この語の歴史的背景や、現在の用法のニュアンスは、まだ私たちには理解がむずかしい。ではファースト・レディの価値はどんなもの？という質問が出た。日本の伝統においては、いかに慎ましい妻をもつか、その奉仕度が夫の価値となるが、アメリカでは、どんな妻をもつか、いかに魅力的な夫人をもつか、という街示的価値が問題となる、つまりファースト・レディは新車やスーパー・カーと同じ価値をもつのではないか、など。

日本語で「アンタ区長ハンのオクサンか？」となりやすい質問は正しくは「アンタのダンナハンは区長か？」と言うべきだと訂正をもとめたことがあるが、報告をきいていると英語にも同様の問題がありそうだという感想があった。つづいて、「日本語と英語とは結局、どっちが女性差別きついのか？」という質問が出現して、報告者は一瞬、答をためらった。そして別に言語学の立場から彼我をくらべると、ある点では彼があるいはこちらが重いと、別の点ではそうでない、ということが無数にある、国語と国語は、総体としては結局は同じ重さなのかもしれないよ、という感想がはさまれた。

これは不思議な答のようにみえるかもしれないが語彙をおぎなったり、説明の長い短いはあっても、どの国語も何でも説明できるといふ原則が成立するとすれば、わかるような気がする。ことばとは何か？という本質的な問題に一步つっこんだ場面であり、もっと展開させるべき質問と答であったのだが、ここで終ったのは残念だった。最後にもういちど英語から日本語にかえて考えた。どの国語にもことばのレベルは幾とおりもあるが、日本語の場合、室町時代に外国人宣教師が婦人語もいれて九つのレベルを記録している例がある。一見してわかるちは何に由来するのかを考えると、男女両性語の語彙のちがいが英語より大きいことと共に、日本語における敬語の問題が浮び上ってきた。女性は男性よりも敬語をつかうことが多い。ある人気者の男性テレビ・タレント兼司会者は女性語で話している。女性語が媚びることば、サービス語であることを意識しての採用だという指摘があった。敬語をのこすかのこさないかは私たちが実践的選択をせまられる問題であろう。

今回の司会をしてみても、専門家から知識の提供や整理があり、これをうけとめる出席者もそれぞれの生活体験に根ざした敏感な反応をしているのにもかかわらず、両者が出会う討論においても一つ結論らしい結論がだせなかったことを反省する。性急な結論をだすことを目標とする必要はないのだが、答がでなかった質問を大切に残して、ひきついでゆきたい。

(出席者十四名・記録、西川裕子)

## ものを書く女たち

——私のひとりごと——

草川 八重子

三年前の秋の夜、私は一人の見知らぬ男に会った。より正しくはみたというべきだが。何かの会の帰り、人気のない道を家に向って自転車をこいでいると向うからその男がやってきたのである。三十半ばのサラリーマンというタイプだが、パジャマ姿で足早に歩いてくる。男は私を認めると一瞬立ち止まり、街灯の下にかけこむと、光の下でパジャマを脱ぎはじめたのである。私はそのまま自転車を走らせ、ふりかえりもしなかったが、男は啞然と立ちすくんでいる気がした。人間が一切の自己表現の手段を持たなくなったとき、街灯の下でパジャマを脱ぐしかないのではないか、そんな恐ろしさが走る私を捉えていた。

女ならそんな事にはならぬだろう、と私は思う。絵や文章を書かなくても、おしゃべりや料理の盛りつけでも自分を表現するすべを知っている。だがそれにあきたらなくなったときは……。

私は何故「小説」（たとえそれがとんでもないものであっても）

を書きたいのか、それを考えるとラッキョウの皮をむいていくように、手の中に何も残らないのに啞然とする。自分の生きたあかしを残したいといっても、もう一方の私が、そんなもの残さなくてもいいと断言する。これをいわねば死ぬにも死にきれぬというほどの切

実な体験があるわけでもない。ときおり私は、出生の秘密があるわけでも、憎まねばならぬ両親を持ったわけでもない平凡な育ち方を恨めしく思うことがある。金持でも極貧でもない、いわば順当な貧乏ぐらし、今の私の生活そのままが四十数年続いている。だが平凡な人間にも、語りたいことはある。時代とかかわって生きている以上、平凡な人間にも時代はさまざまな影を落すのである。自分の生きていく位置をさぐり出したい、与えられた位置づけではなく、時代と自分自身の脈の交うところをさぐりあてたいと願うのである。最近私の仲間一人の女性が加わった。高校で物理を教えていた人が突然、「書いてみたい」と思うようになったのである。彼女の文章を一部紹介しよう。

私は文学とは最も遠い距離にある数学的人間なので、物の見方考え方はXかY。マイナスかプラス、○かしからずんばXです。その単純かつ形而上的思想によって森羅万象から簡単に答を引き出しておりました。二者から択一すればいいのですから、面倒なことはありません。幸せな生活をしている内はそれで間にあいました。ところがです。私にとってミニ太陽位の存在価値を持っていたわが背子が急死してしまいました。（中略）私は死ぬかと思うような不安と寂しさ悲しさにつき落された訳です。経済的にも精神的にも自主独立していかねばならぬのに、心は萎え、足は疎んで立ちあがれません。XかYかという世界では、死という問題はのり越えられるものではありませんでした。（後略）

嫌でも自分自身をみつめねばならぬところに立ったとき、彼女は、もの書くことで自身を支えようと思ったのである。

一字一字文字を書いていく作業は、能動的な仕事である。強制されて書かされる場合は別だが、自分が書こうと思うものを言葉におきかえ文章にするのは。イエスかノウかの意志表示だけではなく、その状況を書くということは、その状況を丸ごと自分が引きうけることである。その作業に、男だから、も女だからもあるのだろうか、と私は思っている。

女の文章の特質を考えようとして、私は困ってしまふ。女の文章はナルシズムの固まりで、水ばしよりの生息地のように湿っている、といい切れればことは簡単だが、そうもいかない。その人の立っているところから、ものをみる、女には女の暮らしがあるのだから、その位置からみる、ということはある。書かれる内容が日常生活であっても、そこからこの本質を見抜くことも出来るのである。ヨーロッパをみてまわっても、テレビで映る風景と同じものしかみない人もいれば、ジャガイモを五百グラム台ばかりにのっけて、計る行為を通して、ものごとの本質をつかむ人もある。

書くべきことを持つ人の文章は、美しい、と私は思う。書くことがないのに文章を飾って穴うめした文はどんなに才気にあふれていようと、すぐに古びて見苦しい。気どりを棄てて裸の自分と向きあうとき、その人の文章が生れる……こんなことを書いて、すべては自分にふりかかる火の粉となるのである。

## 討 論

なぜ「女がものを書く」という発想をとるのか、「ものを書く」ではなくて。それは報告者が報告の最初に、自分には婦人問題とい

う視点が抜け落ちていた。問題はいつも人間の問題であって、婦人の問題という限定はなかったと言われたところにかかわるのだが、それを議論することは、この婦人問題研究会のあり方そのものにながって、たぶん今の会の低迷にひとつのいいきっかけになったのであろうが、出席者全員が女であったから、ものを書くとは、女がものを書くことである式の気楽さで、討論に入ってしまった。

☆よい文学とは何か。

不幸であった方がよい、逆境の中で見えてくるものがある、ということはよく言われる。しかし不幸エコール文学であるならば、社会が幸福な状態になり、人間が真に解放されたとき、文学は不要なのであろうか、そういう議論は一時盛んに行なわれていたが、文学理論として残されていない。

しかし今問題にしているのは「文学」ではなく、「ものを書く」ことだ。この「書いたもの」と文学との間には大きな径庭があるだろう。同人誌の作品や、雑誌、新聞その他の通信欄などの文章について議論を進めた。

☆原体験の問題

戦争体験、病気体験、逆境体験など、素材の豊富さを感じることに、それがこなされ、読者を感動させることとの間には隔りがある。精一ぱいのものは美しい、しかし思いあまって言葉足らずということもある。熱意は伝わるが、作者のきりきり舞いということもある。しかしまた、手なれた演説より、素人のしどろもどろの話の方が内容もあり、感動も深い場合もある。常套語や器用すぎる文章は読者を白けさせるけれど「農民兵士の手記」などは非常に手あかに汚れた言葉が並べられているのに鮮烈である。状況が極限的であること、

ひたむきであることでよい文章が保証されるということもなく、作者の自己表現と、読者としての自己表現の間の細い道を捜して苦しむのではないだろうか。あまりむずかしいことは言わずに、ということばもしばしば出たが、この議論にはもっと深めたい問題があったように思われる。

#### ☆動機の問題

報告者からなぜ書くようになったかという話が出た。学童保育や、PTA、労組の仕事などを通して、問題がまわりにあふれているのに、自分の今いる場所がわからない。自分が何を追求したいのかわからない。その時三ヶ月余りの入院生活があり、立ちどまって考える状態に置かれた、ということであった。私たちは評論家として討論すべきではなかったのだ。たぶん、出席者はそれぞれに、いくらかでも書いた体験をもち、その動機をもちしかも、苦渋した経験をもっているのではないか。そうしたものを出しあった後に、この問題が議論されたら、もっと明確な対話になったのではないか。平凡か非凡かといえば、私たちは多かれ少かれ平凡な生活者にすぎないが、それぞれが自分のドラマをもち、生きて来た。語るべき多くのものをもっているはずだ。しかし書くことは、渴いた時に水をのむようにはなしえない。農村婦人の多くはまさにその状態にあるという話が出た。びっしりあてはまる言葉、確かな言葉もっていない。話しているときはわかったような気になってしまふ。それなのに書けない。あゝもうだめだと思ったときに、はじめて書いたものもいいものになった、という話も出た。亀岡の生活改善グループの総会議案書は各自の変革の歴史が付け加えられているという。それをはじめはつまらない文章でしかなかったのに、少しずつ自分の言

葉を農村婦人がもって来たという感動的な話であった。簡単に自分をさらけ出す、生活を書くというが、それがどんなに困難なことがあるかは想像できる。それを実践しているということのすばらしさ、それであってこそその生活改善であり、自己の変革であるということ。私たちは理解したのであった。

#### ☆テクニクの問題

表現する行為を少しでも多くの人に勧めたい、そうすることで人間が豊かになっていく。よりの確により質高いものを作っていくのには何が必要かという技術に関する発問がなされた。これに対し、同人誌の経験者から、それは積み重ねであるとの意見が出た。実際に号を重ねるにつれて上手になっていく、その過程の中で、自分が見えて来、相手も客観的に見えてくるという。技術はその過程で修得される。これに対して、はっとするものはある日突然出てくるという意見も出た。人間が素直に自分を表現できないのには何かが邪魔している、それはある時とり除かれる、そういうことがあるものだ、という。文章をほめる時女の文章とは思えないという言い方がなされるが、女の文章、男の文章とはどこで異なるかという問題については、その時「女」は感覚的文章、あるいは蔑視的な意味で用いられている。文体は男女によっても異なるだろうし、地方によっても、年齢によっても、生活によっても異なるだろう。たとえば新聞の「女の気持」「ひととき」などに選ばれる文章は、女の文体かもしれぬ。それも編集者の期待する女の文体である。ちまちまとして安全である、さゝやかで美しい。とすれば「女の文章」の「女」は返上したい。

☆場の問題

ストレスの解消のため一段落をつけるために文章を書くのなら、日記を書けばよい。あるいは友人の中でまわし読みをすればよい。活字にする、あるいはその文章を不特定多数に読ませるといふ時には、書く必然性も問われねばならない。書きながら方向を模索していく、あるいは一生けんめい生きているので一生けんめい書くだけでよいか、という問題である。たとえどんなに切実なもの、好きで書いた文章でも、だからよいということにはならない。下手の横好きで尺八を吹くのはちがうはずだ。書くことには社会的な性格がそれ自体の中に負わされているのではないか。書く自分は社会の中の自分であり、読者とむかい合う自分である。歴史を背負った自分である。書くことはそうした自分を組にのせて、恥をさらすことである、読者から切られることを覚悟することである。自分のありよりの客観的意味を問われることを覚悟することである。

出席十三名（文責荒井とみ子）